7/22 Sat.

第259回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 259 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

7/23 Sun.

第259回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 259 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮／チェンバロ／オルガン Associate Conductor & Creative Partner, Harpsichord & Organ	**鈴木優人**（指揮者／クリエイティヴ・パートナー）*–p.7* MASATO SUZUKI
リコーダー Recorder	**アンドレアス・ベーレン** *–p.11* ANDREAS BÖHLEN
トランペット Trumpet	**辻本憲一**（読響首席）*–p.11* KENICHI TSUJIMOTO (YNSO Principal)
オーボエ Oboe	**荒木奏美**（読響首席契約）*–p.11* KANAMI ARAKI (YNSO Principal on Trial)
ヴァイオリン／コンサートマスター Violin, Concertmaster	**日下紗矢子**（読響特別客演コンサートマスター）*–p.11* SAYAKO KUSAKA (YNSO Special Guest Concertmaster)
	鈴木優人（オルガン）**とアンドレアス・ベーレン**（リコーダー）**による即興演奏** Improvisation by M. SUZUKI (Organ) and A. BÖHLEN (Recorder)
クープラン（鈴木優人編） COUPERIN (arr. M. SUZUKI)	**〈諸国の人々〉から"ピエモンテの人々"**［約24分］*–p.15* Les Nations "La Piemontoise"
J. S. バッハ J. S. BACH	**ブランデンブルク協奏曲 第2番** ヘ長調 BWV 1047［約13分］*–p.16* Brandenburg Concerto No. 2 in F major, BWV1047 I. Allegro II. Andante III. Allegro assai
［休憩］ [Intermission]	
ラヴェル RAVEL	**組曲〈クープランの墓〉**［約17分］*–p.17* "Le Tombeau de Couperin" Suite I. Prélude II. Forlane III. Menuet IV. Rigaudon
プロコフィエフ PROKOFIEV	**交響曲 第1番** ニ長調 作品25**〈古典〉**［約15分］*–p.18* Symphony No. 1 in D major, op. 25 "Classical" I. Allegro II. Larghetto III. Gavotte: Non troppo allegro IV. Finale: Molto vivace

※終演後、鈴木優人によるアフタートークを行います。
　司会（MC）…22日：鈴木美潮（読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局専門委員）、23日：松本良一（読売新聞文化部）

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

7/27 Thu.

第630回 定期演奏会
サントリーホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 630 / Suntory Hall 19:00

指揮 Principal Conductor	**セバスティアン・ヴァイグレ**（常任指揮者）*–p.8* SEBASTIAN WEIGLE
ヴァイオリン Violin	**樫本大進** *–p.12* DAISHIN KASHIMOTO
コンサートマスター Concertmaster	長原幸太 KOTA NAGAHARA
モーツァルト MOZART	**フリーメイソンのための葬送音楽** ハ短調 K. 477［約6分］*–p.19* Maurerische Trauermusik in C minor, K. 477
細川俊夫 HOSOKAWA	**ヴァイオリン協奏曲〈祈る人〉** （ベルリン・フィル、ルツェルン響、読響の国際共同委嘱作品／日本初演）［約25分］*–p.20* "Prayer" for violin and orchestra (Internationally co-commissioned work by Berliner Philharmoniker, Luzerner Sinfonieorchester, YNSO / Japan Premiere)
［休憩］ [Intermission]	
モーツァルト MOZART	**交響曲 第31番** ニ長調 K. 297**〈パリ〉**［約17分］*–p.22* Symphony No. 31 in D major, K. 297 "Paris" I. Allegro assai II. Andantino III. Allegro
シュレーカー SCHREKER	**あるドラマへの前奏曲**［約22分］*–p.23* Vorspiel zu einem Drama

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））
　　独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社
※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

8/23 Wed.

大成建設presents読響サマーフェスティバル2023
《三大協奏曲》東京芸術劇場コンサートホール 18時30分開演
YNSO SUMMER FESTIVAL 2023 "THE GREATEST CONCERTOS",
presented by TAISEI CORPORATION / Tokyo Metropolitan Theatre 18:30

指揮
Conductor
坂入健司郎 *–p.9*
KENSHIRO SAKAIRI

ヴァイオリン
Violin
前田妃奈 *–p.12*
HINA MAEDA

チェロ
Cello
鳥羽咲音 *–p.13*
SAKURA TOBA

ピアノ
Piano
亀井聖矢 *–p.13*
MASAYA KAMEI

コンサートマスター
Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64［約26分］*–p.26*
Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

チェロ協奏曲 ロ短調 作品104［約40分］*–p.27*
Cello Concerto in B minor, op. 104
I. Allegro
II. Adagio ma non troppo
III. Allegro moderato

［休憩］
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23［約32分］*–p.28*
Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23
I. Allegro non troppo e molto maestoso – Allegro con spirito
II. Andantino semplice
III. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社
事業提携：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

大成建設 For a Lively World

8/26 Sat.

大成建設presents読響サマーフェスティバル2023
《三大交響曲》東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
YNSO SUMMER FESTIVAL 2023 "THE GREATEST SYMPHONIES",
presented by TAISEI CORPORATION / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
坂入健司郎 *–p.9*
KENSHIRO SAKAIRI

コンサートマスター
Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

シューベルト
SCHUBERT

交響曲 第7番 ロ短調 D759〈未完成〉［約25分］*–p.29*
Symphony No. 7 in B minor, D759 "Unfinished"
I. Allegro moderato
II. Andante con moto

ベートーヴェン
BEETHOVEN

交響曲 第5番 ハ短調 作品67〈運命〉［約31分］*–p.30*
Symphony No. 5 in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro – IV. Allegro

［休憩］
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

交響曲 第9番 ホ短調 作品95〈新世界から〉［約40分］*–p.31*
Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社
事業提携：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

大成建設 For a Lively World

8/31 Thu.

第664回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 664 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ローター・ツァグロゼク *–p.10*
LOTHAR ZAGROSEK

コンサートマスター
Concertmaster
長原幸太
KOTA NAGAHARA

ブルックナー
BRUCKNER

交響曲 第８番 ハ短調 WAB108（ハース版）
［約80分］ *–p.33*

Symphony No. 8 in C minor, WAB108 (Haas Edition)
I. Allegro moderato
II. Scherzo: Allegro moderato
III. Adagio: Feierlich langsam, doch nicht schleppend
IV. Finale: Feierlich, nicht schnell

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。
*No intermission

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））
独立行政法人日本芸術文化振興会

指揮／チェンバロ／オルガン

鈴木優人
（指揮者／クリエイティヴ・パートナー）

MASATO SUZUKI,
Associate Conductor & Creative Partner,
Harpsichord & Organ

バロックと近代音楽の妙なるマッチング

© 読響

指揮者、作曲家や鍵盤楽器奏者などマルチな才能で新時代を切り開く気鋭・鈴木優人が、独創的なプログラムを披露し、沸き立つ喜びを表現する。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学卒業および同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外の楽団と共演するほか、鍵盤楽器奏者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン（BCJ）の首席指揮者に就任。BCJオペラシリーズのプロデューサーを務め、20年のヘンデル〈リナルド〉は、バロック・オペラの新機軸として高く評価された。また、19年から世界的ヴィオラ奏者タメスティとの「バッハ・プロジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭をはじめ、欧州各地で演奏をしている。22年4月にはハンブルク響を指揮し成功を収めた。23年3～4月には名門オランダ・バッハ協会に客演し、J.S. バッハ〈マタイ受難曲〉（全13公演）を指揮した。

作曲家としても活躍するほか、13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務め、NHK-FM「古楽の楽しみ」に出演するなど、活動は多岐にわたる。芸術選奨文部科学大臣新人賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、渡邉曉雄音楽基金音楽賞など受賞多数。20年4月から読響の指揮者／クリエイティヴ・パートナーとして多くの公演を指揮するほか、《アンサンブル・シリーズ》をプロデュースして好評を博している。23年4月から関西フィル首席客演指揮者。九州大学客員教授。

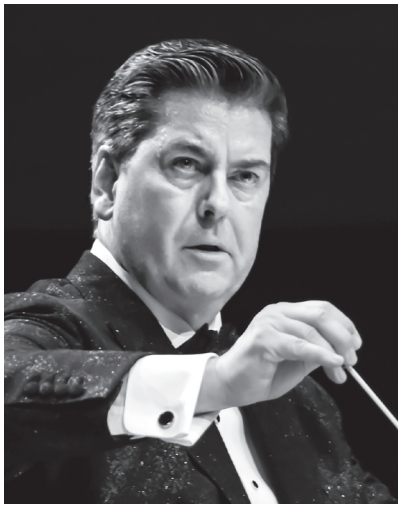
7/27
定期
Maestro

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ
（常任指揮者）

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

ヴァイグレが描く
儚さと美しさ



©読響

ドイツの名匠ヴァイグレが、モーツァルトの二作品と細川俊夫の新作、そしてシュレーカーのオペラティックな作品を並べ、多様な美、祈りと静寂を描き出す。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴びた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、評判を呼んだ。08年から今夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務めた。11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、15年、18年、20年には同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。21年にはメトロポリタン歌劇場でムソルグスキー〈ボリス・ゴドゥノフ〉を、22年7月にはバイエルン国立歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を指揮するなど、国際的な活躍を続ける。23年7月、フランクフルト歌劇場での最後の公演としてルディ・シュテファンの〈最初の人類〉を振り、話題を呼んだ。これまでに、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭に出演したほか、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団とも共演を重ねている。コロナ禍では何度も隔離期間を経て来日し、読響と充実した演奏を繰り広げファンを魅了した。

8/23
三大協奏曲
8/26
三大交響曲
Maestro

指揮

坂入健司郎

KENSHIRO SAKAIRI, Conductor

読響・夏の名曲選

©Taira Tairadate

異色の経歴を持ちながら、音楽への愛を全身で表し、クラシック音楽界を賑わせる注目の風雲児。《三大協奏曲》では、若き3人のソリストを盛り立て、《三大交響曲》では、クラシックの王道〈未完成〉〈運命〉〈新世界から〉を一挙に指揮する。

1988年神奈川県川崎市生まれ、慶應義塾大学卒業。これまで指揮法を井上道義、小林研一郎、三河正典、山本七雄の各氏に、チェロを望月直哉に師事。一般企業に勤めつつ、2008年から東京ユヴェントス・フィルを主宰。これまでも同フィルを定期的に指揮し、デームスや舘野泉ら巨匠と共演するほか、22年1月にマーラーの交響曲第2番〈復活〉を演奏し、好評を博した。15年ラ・フォル・ジュルネ音楽祭に出演し、『モーストリー・クラシック』誌で「注目の気鋭指揮者」として推薦される。16年には川崎室内管を立ち上げて音楽監督に就任。その活動がメディアに取り上げられ、話題を呼んだ。

21年より指揮活動に専念しており、これまでに大阪響、名古屋フィル、大阪フィル、日本フィル、新日本フィル、神奈川フィル、仙台フィル、愛知室内、群馬響、京都市響他と共演するなど、活躍の場を広げている。録音では〈月に憑かれたピエロ〉（2020、日本コロムビア）を始め多数リリース。22年4月には甲府公演で読響と初共演し、好評を博した。今回が2度目の共演。かわさき産業親善大使。

8/31
名曲
Maestro

指揮

ローター・ツァグロゼク

LOTHAR ZAGROSEK, Conductor

ツァグロゼク
渾身のブルックナー

©読響

ドイツの巨匠ツァグロゼクが約4年ぶりに読響の指揮台にあがる。ブルックナーの傑作、交響曲第8番を指揮し、壮大なスケールの宇宙を描き出す。

1942年バイエルンに生まれ、H. スワロフスキー、B. マデルナ、カラヤンらに師事。パリ・オペラ座、ライプツィヒ歌劇場の音楽総監督、ベルリン・コンツェルトハウス管の首席指揮者などを歴任。97年にシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任し、ノーノやラッヘンマンの現代オペラやワーグナー〈ニーベルングの指環〉4部作などを指揮して絶賛された。2006年までの在任期間に、同歌劇場は権威ある専門誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀歌劇場」に5度選ばれ、さらに同誌の「年間最優秀指揮者」に3度も選出されている。

これまでにベルリン・フィル、フランス国立管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン・フィルなどと共演している。また、ウィーン国立歌劇場、ハンブルク歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、ザルツブルク音楽祭などで活躍。録音の数は多く、シュレーカーの歌劇〈烙印を押された人々〉をはじめとするデッカ・レーベルの「退廃音楽」シリーズのほか、ラッヘンマンの歌劇〈マッチ売りの少女〉などがある。

音楽教育や若手の育成にも情熱を注いでおり、ドイツ音楽協議会指揮フォーラム芸術諮問委員会の会長を務める。17年にはドイツ連邦共和国の一等功労十字章を授与。読響には16年、19年に続き、3回目の登場。

7/22
土曜マチネー
7/23
日曜マチネー
Artist

リコーダー

アンドレアス・ベーレン

ANDREAS BÖHLEN, Recorder

リコーダー奏者やジャズ・サックス奏者として国際的に活躍する鬼才。

1983年生まれ。6歳からリコーダーを始め、その後アルト・サクソフォンも始める。リコーダーをヴァルター・ヴァン・ハウヴェらに師事、古典音楽即興法をルドルフ・ルッツらに学ぶ。自ら主宰した古楽アンサンブル「テアトルム・アフェクトゥーム」やジャズ・グループ「アンドレアス・ベーレン・バンド」などで活動するほか、ハーグ・レジデンティ管、カプリッチョ・バロック管、バッハ・コレギウム・ジャパンなどと共演している。エオルス・レーベルなどからCDをリリース。現在はスイスの音楽大学「バーゼル・スコラ・カントルム」にてリコーダーを教えるなど後進の指導にもあたっている。今回が読響と初共演。

©読響

トランペット

辻本憲一
（読響首席）

KENICHI TSUJIMOTO, Trumpet
(YNSO Principal)

©Kenryou Gu

オーボエ

荒木奏美
（読響首席契約）

KANAMI ARAKI, Oboe
(YNSO Principal on Trial)

©読響

ヴァイオリン

日下紗矢子
（読響特別客演コンサートマスター）

SAYAKO KUSAKA, Violin
(YNSO Special Guest Concertmaster)

7/27
定期
Artist

©Keita Osada (Ossa Mondo A&D)

ヴァイオリン

樫本大進

DAISHIN KASHIMOTO, Violin

ヨーロッパ楽壇の最前線で活躍している、日本を代表する名手。フリッツ・クライスラー、ロン＝ティボーの両コンクールでの第1位など、5つの権威ある国際コンクールで優勝。マゼール、小澤征爾、ヤンソンス、ラトルら著名指揮者のもと、国内外の楽団と共演した。室内楽でも、クレーメル、堤剛らと共演を重ね、現在は兵庫県で「ル・ポン国際音楽祭〜赤穂・姫路」を音楽監督として率いている。2010年からはベルリン・フィル第1コンサートマスターとして活躍する。主なCDに、ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ全集（ワーナー・クラシックス）など。使用楽器は、株式会社クリスコ（志村晶代表取締役）から貸与された1744年製デル・ジェス「ド・ベリオ」。読響とは1998年以来、2回目の共演。

8/23
三大協奏曲
Artist

©Julia Wesely

チェロ

鳥羽咲音

SAKURA TOBA, Cello

“天才アーティスト”の呼び声高いウィーン生まれの驚異の18歳。6歳から毛利伯郎に師事。早くから国内外のコンクールで優勝・入賞し、注目を浴びる。2019年に日本フィルと共演して以降、群馬響などと共演。22年には東京・春・音楽祭へ出演するなど、活躍の場を広げている。20年NHK-FM「リサイタル・パッシオ」に出演。19年に服部真二音楽賞、21年に若林暢音楽賞を受賞。江副記念リクルート財団およびロームミュージックファンデーション奨学生。20年より桐朋学園大学音楽学部ソリスト・ディプロマ・コースに在籍。22年よりベルリン芸術大学にてイェンス＝ペーター・マインツに師事。使用楽器はアンネ＝ゾフィー・ムター財団より貸与された1840年製のジャン＝バティスト・ヴィヨーム。読響初登場。

8/23
三大協奏曲
Artist

昨年ヴィエニャフスキ国際コンクールで優勝し、国際的に注目を集める新鋭。2002年大阪府生まれ。東京音楽大学付属高等学校を経て、東京音楽大学に特別特待奨学生として在学中。これまでに日本音楽コンクール第2位および岩谷賞（聴衆賞）、東京音楽コンクール弦楽部門第1位および聴衆賞など、国内外のコンクール、オーディション、マスタークラスでの受賞多数。11歳で関西フィルと共演以降、大阪フィル、東京響、日本フィル、新日本フィルなどと共演。リサイタル、室内楽やアウトリーチにも積極的に取り組んでいる。20/21年シャネル・ピグマリオン・デイズ参加アーティスト。江副記念リクルート財団奨学生。使用楽器は、日本音楽財団より貸与された 1715年製ストラディヴァリウス「ヨアヒム」。読響初登場。

©Taira Tairadate

ヴァイオリン

前田妃奈

HINA MAEDA, Violin

昨年のロン＝ティボー国際コンクールで優勝し人気沸騰中の新鋭。2001年生まれ。4歳よりピアノを始める。桐朋学園大学1年在学中に日本音楽コンクール第1位および聴衆賞受賞。22年マリア・カナルス国際コンクール第3位、ヴァン・クライバーン国際コンクールのセミファイナリストなど、国内外での受賞多数。これまでにNHK響、東京響、東京フィル、日本フィル、新日本フィル、大阪響、関西フィル、京都市響などと共演を重ねる。23年文化庁長官表彰（国際芸術部門）、第32回出光音楽賞など受賞多数。22年には「VIRTUOZO」をリリースし、『レコード芸術』誌にて特選盤に選出。また、テレビ朝日「題名のない音楽会」、NHK「クラシック倶楽部」など、メディアでも多数取り上げられている。読響とは22年以来、2度目の共演。

©Taira Tairadate

ピアノ

亀井聖矢

MASAYA KAMEI, Piano

8/23
三大協奏曲
Artist

クープラン（鈴木優人編）
〈諸国の人々〉から“ピエモンテの人々”

フランスの音楽家系の一家に生まれたフランソワ・クープラン（1668〜1733）は、若い頃よりパリのサン・ジェルヴェ教会専属オルガニストとして奉職していました。しかし報酬の支払いで幾度となく揉(も)めるなどの不和が生じ、嫌気がさしたことから、空いた時間には華やかなパリの社交界へ出入りし、世俗の世界で流行していたイタリア趣味の芸術と出会います。のちに、教会の仕事を続けながら、ヴェルサイユ宮殿のオルガン奏者兼チェンバロ奏者としても働くことになります。

この〈諸国の人々〉は、クープランの後期作品の中でも傑作の一つに数えられる作品で、最低4人から演奏できる、4つの組曲による室内楽作品集として書かれました。4つの組曲はそれぞれ“フランスの人々”“スペインの人々”“神聖ローマ帝国（現在のドイツ・オーストリアなど）の人々”“ピエモンテ（イタリア北西部）の人々”と題されていますが、いずれも、自身が社交界へ足を踏み入れ始めた20代の時に書かれたトリオ・ソナタをもとに、30年以上の時を経て発展させた形として作曲されました。〈諸国の人々〉の楽譜の序文には、イタリア趣味が流行する社交界に作品を受け入れてもらうために、作曲者としての自分の名前をわざとイタリア語風に変えた思い出も、裏話として綴(つづ)られています。

今回はその中でも、第4組曲にあたる“ピエモンテの人々”を、リコーダーも参加する鈴木優人さん編曲の特別バージョンとしてお聴きいただきます。

第1曲「ソナタ」は、2つのエール（牧歌的な歌）を中心に据える形で、重々しい曲想と生き生きした曲想が頻繁に入れ替わります。次に、気品の漂う**第2曲「アルマンド」**、符点のリズムが特徴的な**第3曲「クーラント第1番」**、前曲のクーラントよりも明るさと活発さを持った**第4曲「クーラント第2番」**、幾分か艶(なまめ)かしささえも感じられる**第5曲「サラバンド」**、3つのクープレを持つ**第6曲「ロンドー」**、そして“愛情を持って”演奏される**第7曲「ジグ」**で曲を閉じます。

〈大井 駿 指揮者・ピアニスト・古楽器奏者〉

作曲：1726年／初演：不明／演奏時間：約24分
楽器編成／フルート、オーボエ、ファゴット、リコーダー、チェンバロ、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、チェロ、コントラバス

J. S. バッハ
ブランデンブルク協奏曲 第２番 ヘ長調 BWV 1047

現在のドイツ中部アイゼナハで生まれ、ドイツ各地を転々としたのち、27年にわたってライプツィヒの聖トーマス教会にてカントル（オルガニストや作曲家を兼ねる音楽監督のようなもの）を務めたヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1685〜1750）。いつ、どのような目的で書かれたのかは、未だ定かではありませんが、全部で6曲のブランデンブルク協奏曲は、バッハがライプツィヒへ拠点を移す前のケーテン時代に書かれ、ブランデンブルク辺境伯クリスティアン・ルートヴィヒに献呈されました。

6曲のセットとしてまとめられたこの協奏曲集は、作品によってコンセプトや、ソロを任される楽器が異なっており、その中でもブランデンブルク協奏曲第２番は、トランペット、リコーダー、オーボエ、そしてヴァイオリンの4つの楽器が、ソロとして登場する合奏協奏曲（複数のソロと伴奏による協奏曲）として書かれています。

中でも、名声の女神ペーメー（ファーマ）が手に持っていることで、辺境伯の名声を讃える象徴として用いられているトランペットは、異常なほど高音域で書かれています。もともとは高音を演奏しやすいクラリーノ（小さなホルンのような形の楽器）のために書かれたのではないかと言われています。

余談ですが、1977年に打ち上げられたボイジャー探査機に、地球外生命体に地球の文化を伝えるために搭載されたゴールデンレコードというものがあり、ドイツはもとより、地球を代表する音楽作品の一つとして、このブランデンブルク協奏曲第２番第1楽章が収録され、現在でもこの作品を乗せて宇宙のどこかを彷徨（さまよ）っています。

第1楽章　4つの楽器がそれぞれ交代しながら見せ場を発揮する、華やかな楽章。

第2楽章　トランペットは沈黙し、3人のソロと低音楽器によって、カノンのように同じメロディが次々と重なって演奏される楽章。

第3楽章　高らかに演奏されるトランペットのソロによって始まる、フーガ風の楽章。

〈大井 駿 指揮者・ピアニスト・古楽器奏者〉

作曲：1718〜19年／初演：1721年以前／演奏時間：約13分
楽器編成／チェンバロ、弦五部、独奏リコーダー、独奏オーボエ、独奏トランペット、独奏ヴァイオリン

ラヴェル
組曲〈クープランの墓〉

愛国心が故に、第一次世界大戦に従軍したフランスの作曲家モーリス・ラヴェル（1875〜1937）が、フランスのバロック時代の様式にならい、戦死した友人を想って大戦中に書いた作品。題名にあるクープランとは、本日の演奏会でも演奏されるフランスの作曲家、フランソワ・クープランのことで、彼をはじめとしたバロック時代の作曲家の多くが定型として用いた、舞曲による組曲を模倣する形で書かれました。原題にある “Tombeau” は、通常「墓」を意味するフランス語ですが、16世紀ごろのフランスでは、死者の思い出のために書かれた作品のことを指します。ラヴェルはタイトル自体も、このいにしえのスタイルを踏襲しました。

もともとは6つの曲からなる組曲としてピアノのために書かれ、それぞれの作品が大戦の露（つゆ）と消えた友人に捧げられています。終戦してすぐ、オーケストラのための編曲を開始し、ピアノ版の6曲のうち、舞曲でない「フーガ」と「トッカータ」を除外した、前奏曲と3つの舞曲による組曲として完成させました。

第1曲「前奏曲」　とめどない16分音符が特徴的な前奏曲は、似たモチーフを即興的に繰り返す古典的な前奏曲のスタイルを模倣した形で書かれています。

第2曲「フォルラーヌ」　イタリア北東部フリウリが発祥のフォルラーヌは、18世紀初頭にフランスの宮廷で流行した官能的な踊り。ラヴェル自身、クープランの〈王宮のコンセール〉のフォルラーヌを管弦楽用に編曲しており、リズムやトリルなどを参考にしたとされています。

第3曲「メヌエット」　典型的な三部形式で、宮廷舞曲らしい高雅さを持つメヌエット。中間部では、バグパイプを模したバスによるミュゼットが挿入されます。そして、メヌエットとミュゼットのメロディが一体となってラヴェルの腕が光る再現部も聴きどころです。

第4曲「リゴドン」　宮廷舞曲としても、民俗舞曲としても人気を博した、生き生きとした南フランス発祥の踊り。メランコリックな中間部とのコントラストも特徴的です。

〈大井 駿 指揮者・ピアニスト・古楽器奏者〉

作曲：1914〜1917年（ピアノ版）、1919年（管弦楽版）／初演：1920年2月28日、パリ（管弦楽版）／演奏時間：約17分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット、ハープ、弦五部

プロコフィエフ
交響曲 第1番 ニ長調 作品25〈古典〉

ロシアのソンツォフカ（現在のウクライナ・ドネツク州）に生まれたセルゲイ・プロコフィエフ（1891〜1953）が、サンクトペテルブルク音楽院を卒業して間もない頃に作曲した交響曲。この作品もラヴェル〈クープランの墓〉同様、過去の作曲家をオマージュして作曲されています。

当初、音楽院ではピアノと作曲を専攻していましたが、この曲の発端は、彼が受講していた指揮のレッスンでした。指揮者ニコライ・チェレプニンが行っていた「ハイドンとモーツァルトのオーケストラ作品の楽譜の読み方」というゼミで、ハイドンの作曲法に感激し、いつかハイドンのスタイルで作品を書いてみたいと思うようになったのです。

音楽院を卒業してからは、難しい哲学書に手をつけてみたり、そうかと思えば机に向かって作曲をしてみたり……という生活を送っていましたが、ふと学生時代に思い立ったハイドンの様式に基づいた作品への憧れを思い出し、筆を執ります。自伝の中でも、その時の想いやコンセプトを次のように綴（つづ）っています。「もしもハイドンが同じ時代に生きていたら、古い様式をベースにしつつ、新しいアイデアを取り入れ、いたずら心や遊び心を忍び込ませた作品にしたはずだと思う。私はそんな曲を書いてみたかった。その名も、『古典交響曲』という名前で」。

ハイドンの作品には、「終わりと見せかけて終わらない」「ゆったりとした静かな曲の途中に突然大音量で演奏してびっくりさせる」という、おふざけのような音楽がちりばめられていますが、この曲にも、つい頬を緩ませてしまうような仕掛けが隠されています。

第1楽章　ソナタ形式によって書かれた古典的な楽章、と思いきや予想外の転調やハーモニーなどに満ちています。**第2楽章**　透明感のある、メヌエット風の緩徐楽章。**第3楽章**　16世紀より宮廷舞曲としても人気を博した、ガヴォットの楽章。**第4楽章**　ついつい気持ちが踊るような推進力に溢れる、ソナタ形式の楽章。対位法も巧みに用いています。　〈大井 駿 指揮者・ピアニスト・古楽器奏者〉

作曲：1916〜1917年／初演：1918年4月21日、ペトログラード（現サンクトペテルブルク）／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

モーツァルト
フリーメイソンのための葬送音楽 ハ短調 K.477

ヨーゼフ2世の寛容政策により、ウィーンのフリーメイソンは勢いを増した。たとえば分団「真の融和」には、1781年の段階で26名の会員しかいなかったが、85年までにその数は210名まで膨れ上がる。これは一種の流行で、結社の思想に共鳴するか否かに関わらず、多くの名士や知識人がこぞって入会した。

ウィーンのフリーメイソンが全盛を極めた1784年、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756〜91）もまた、分団「慈善」に加入する。作曲家は真面目に活動したらしく、入会翌年には「徒弟」から「職人」へと会員の位階を上げた。「親方」への昇進もそれからまもなくだったはずだ。

こうした熱心さの表れとして85年、モーツァルトはこの結社のために曲を集中的に書いた。カンタータ〈フリーメイソンの喜び〉 K.471、歌曲〈結社員の旅〉K.468などがそうだ。

〈フリーメイソンの葬送音楽〉K.477もそのうちのひとつ。モーツァルトはこの作品を、結社の有力会員で、敬慕していたメクレンブルク＝シュトレーリッツ大公とエステルハージ・フォン・ガランタ伯を追悼するために書いた。85年の11月初旬に2人が相次いで亡くなったのだ。

もともとこの曲は、男声合唱と管弦楽のための作品だった。作曲家は両貴族の追悼にあたり、まず声楽を取り除き、11月17日の儀式で披露。続いて2本のバセットホルンと1本の「グラン・ファゴット」を追加して、12月9日にも演奏したらしい。

特徴的なのは定旋律を持つ点だ。定旋律とは作品の基となる旋律を意味し、これを長い音符で引き伸ばして、ひとつの声部に担わせる。〈葬送音楽〉ではエレミアの哀歌の一部を引用している。

曲は3部分からなる。管楽器の和音が翳（かげ）りのある響きを成す中、ヴァイオリンが蛇行した旋律でそれに続く。長調に移ったあたりで定旋律が現れる。シンコペーションによる不協和な分散和音の後、冒頭を再現する。　〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1785年／初演：1785年8月12日（合唱付き初稿）、11月17日（合唱を削除した第2稿）、12月9日（管楽器を増強した第3稿）／演奏時間：約6分
楽器編成／オーボエ2、クラリネット、バセットホルン3、ファゴット、ホルン2、弦五部

細川俊夫
ヴァイオリン協奏曲〈祈る人〉
（ベルリン・フィル、ルツェルン響、読響の共同委嘱作品／日本初演）

細川俊夫

2020年に始まったパンデミックが終結することなく、22年2月にウクライナ戦争が始まり、世界はますます混迷を深めようとしている。個人的なことだか、そのような時に、私の母は亡くなり、また私自身も病いに倒れ、入院、手術を繰り返した。このヴァイオリン協奏曲〈祈る人〉は、そうした時代に生まれた作品である。

私はかねてから、仏教の仏像を鑑賞するのを楽しみとしている。日本には寺院の中だけではなく、何でもない路傍にも、石や木の仏像が置いてあることがある。それらの多くは無名の彫刻家（仏師）によって彫られ、長い間、人々に大切に見守られ、保存され続けてきた。その仏像の「祈り」は、見えないところで、私たちを支えてくれているのでないだろうか。私の音楽作品も、この無名の彫刻家が生み出した仏像のような「祈り」を持ったものにできないだろうか。

私は、音楽の起源はシャーマニズムの祝祭にあり、シャーマンの祈りの歌が根本にあるのだと考えている。このヴァイオリン協奏曲でも、独奏者はシャーマンであり、背景のオーケストラはシャーマンの内と外に拡がる宇宙、自然であると捉えている。シャーマンは、宇宙に向かって歌いかけ、それに対して宇宙は呼応したり反発したりする。その歌の交換のうちに、次第に祈りは深まり、ついにシャーマンは宇宙、自然と一体化していく。

全体は5つの部分に分かれる。

1、 **序。**天から精霊がゆっくりと降りてくる。

2、 **間奏曲。**静かに天から地に向かって、グリッサンドで降りてくる精霊の声に、人（ヴァイオリン独奏）が、受け応える。

3、 **祈りのうた。**大地に生きる人間の歌。低音から、次第に上昇していく。

4A、**闘争A.** 人の歌（ヴァイオリン）が、激しく上へ向かって行き、それに対してオーケストラが激しく反応する。

B、**闘争B.** さらに激しく動き回るヴァイオリンに、オーケストラは、それを圧倒するように攻撃的に反応する。

5、 **浄化。**オーケストラが調和的なオクターヴを静かに持続させ、その中に独奏ヴァイオリンは、ゆっくりと溶け込んでいく。

初演者の樫本大進にこの作品を捧げる。ヴァイオリンを演奏する樫本大進の姿は、私には「祈る人」のように見える。

作曲：2022〜23年／初演：2023年3月2日、ベルリン／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、バスクラリネット、ファゴット、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、マラカス、鞭、ボンゴ、銅鑼、クロテイル、風鈴、鈴）、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

細川俊夫 TOSHIO HOSOKAWA

1955年広島生まれ。1976年からドイツへ留学し、ベルリン芸術大学およびフライブルク音楽大学で研鑽を積む。80年代以降、欧州と日本を中心に作曲活動を展開し、日本を代表する作曲家として、欧米の主要な楽団、音楽祭、歌劇場から委嘱を受け、国際的に高い評価を得ている。2016年1月には東日本大震災の後の福島をテーマとしたオペラ〈海、静かな海〉（ハンブルク国立歌劇場委嘱作品／原作・演出：平田オリザ）、17年12月には〈二人静－海から来た少女－〉（アンサンブル・アンテルコンタンポランの委嘱／原作：平田オリザ／演奏会形式）、18年7月にはオペラ〈地震・夢〉（シュトゥットガルト歌劇場委嘱作品／台本：マルセル・バイアー、原作：ハインリヒ・フォン・クライスト『チリの地震』）が、カンブルラン指揮によりシュトゥットガルト歌劇場で初演されるなど精力的に新作を発表し、いずれも大きな注目を集めるとともに、高い評価を受けた。

これまでにベルリン・ドイツ響、西ドイツ放送局合唱団、ネーデルラント・フィル、東京響、広島響のコンポーザー・イン・レジデンスを歴任。ベルリンおよびバイエルンの芸術アカデミー会員。12年紫綬褒章受章など受章・受賞歴多数。現在、武生国際音楽祭音楽監督、東京音楽大学およびエリザベト音楽大学客員教授。

モーツァルト
交響曲 第31番 ニ長調 K.297〈パリ〉

モーツァルトは旅烏(たびがらす)だった。幼いころからヨーロッパ中を巡り、さかんに自分を売り込んだ。そのうち、作曲家にとってもっともつらい旅となったのが、1778年のパリ滞在である。

直前にいたマンハイムで、優秀なオーケストラによる演奏を聴き、音楽的感興を大きく掻き立てられる一方、同地の音楽家の娘アロイジア・ウェーバーとの仲を、故郷の父に認めてもらえず、落ち込んでもいた。パリでは厚遇されず、期待していた報酬も少ない。さらに7月3日、同行していた母が客死した。

交響曲第31番〈パリ〉K.297は、こうした環境の中、モーツァルトが書き上げた作品だ。依頼主は管弦楽団コンセール・スピリチュエルの支配人ジョセフ・ル・グロ。この楽団は大編成のオーケストラとして、市民を相手に公開演奏会をおこなっていた。

この楽団の特性と、パリの聴衆の好みとに合わせて作曲家は、第31番にさまざまな工夫を凝らしたようだ。

モーツァルトは**第1楽章**に関して「最初のアレグロの真ん中に、向こう受けするはずのパッセージがありますが、聴き手はそこで一斉に熱狂しました。（中略）効果的なので最後にもこれを出しておきました」と父親に報告している。

それは提示部の第84〜92小節、およびコーダの第257〜269小節だと考えられている。急ぎ足で音の階段を上り、ゆったりと下りた後、上っては飛び降りるを繰り返して聴き手の情緒を煽(あお)る。

第2楽章には初稿と改訂稿とがある。初稿で作曲家はその手練(しゅれん)を発揮したが、依頼主の横槍で新しいアンダンテを書く羽目になった。初稿の音楽は第1主題と第2主題とを交互に奏するロンド形式風に進む。

モーツァルトは**第3楽章**の冒頭を「ヴァイオリン2本だけの弱音で始め」た。パリの趣味が総奏のユニゾンであることを逆手に取ったのだ。「8小節だけそれを続け、すぐにフォルテに」。すると「フォルテと同時に聴き手の拍手が沸き上がった」という。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1778年／初演：1778年6月18日、パリ／演奏時間：約17分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

シュレーカー
あるドラマへの前奏曲

「退廃芸術」はナチスの芸術観のひとつで、党の意向に染まないアートに対して用いられた。「退廃音楽」はその音楽版だ。1930年代、作品にその烙印を押されたのがフランツ・シュレーカー（1878〜1934）、その人である。

シュレーカーは19世紀末にウィーンで作曲を学んだ。在学中にオーケストラ曲〈ラブ・ソング〉を公開初演するなど、早くから注目を集めた。1900年には卒業制作の管弦楽付き合唱曲〈詩篇第116篇〉で高い評価を得る。同地の楽友協会が翌年、これを演奏会で取り上げた。弦楽のための間奏曲で作曲コンクールを制したのが02年。まさに俊英だ。

08年、分離派の大規模展覧会「クンストシャウ」のオープニングのため、作曲家はバレエ音楽〈王女の誕生日〉を書いた。グレーテ・ヴィーゼンタールのダンスとともに、この作品は大成功を収める。12年にはオペラ〈はるかな響き〉でシュレーカーは、ドイツの進歩的作曲家のひとりとして、その地位を確固たるものとした。

順風満帆の航路は13年、時化(しけ)に遭遇する。オペラ〈玩具と姫君〉の評価が芳しくない。ウィーンでは酷評、フランクフルト・アム・マインではお義理の拍手をもらう。この高波を打ち破ったのが、18年のオペラ〈烙印を押された人々〉（作曲は1913〜15年）だった。シュレーカーはフランクフルト・アム・マインでの初演で大喝采を浴び、卓越した作曲家であることを改めて証明した。

管弦楽曲〈あるドラマへの前奏曲〉（13年）は、このオペラと深い関係を持つ。作曲家は〈烙印を押された人々〉の音楽を使って〈前奏曲〉を構成したからだ。さらにその〈前奏曲〉を要約・短縮し、オペラ本編の序曲（おそらく15年）とした。

シュレーカーの名声がもっとも高まったのは 、20年にベルリンに移り、同地の音楽大学の学長職についてからのおよそ10年間。それ以降は、彼にとって地獄の30年代が始まる。ナチスに「退廃音楽」のレッテルを貼られた。作曲家は失意の中、心臓発作を起こし、回復することなく世を去る。

オペラ〈烙印を押された人々〉のあらすじは次のとおり。

アルヴィアーノはジェノヴァの貴族。体の不具合から人付き合いを避けている。海に人工島を作らせ、そこを自らの理想郷とすることで心を慰めていた。その理

想郷を仲間の貴族たちが悪用する。それを恥じたアルヴィアーノはこの島を市に寄贈し、誰でも入れるようにすることで、悪事を止めようとする。

公証人や議員により島の寄贈手続きが行われる。そこに議員の娘カルロッタがいた。カルロッタは心を病み、絵を描いて孤独に暮らしていた。そのカルロッタがアルヴィアーノに、絵のモデルとなるよう声をかける。見かけるたびに彼の魂の美しさに惹かれていたのだという。すでに姿の描かれた絵にはまだ顔がない。アルヴィアーノはついにカルロッタのアトリエを訪れる。そこでふたりは互いへの愛を告白するのだった。

島を訪れた市民は、その美しさに感嘆する。悪事を働いていた貴族がカルロッタに横恋慕して結婚を申し込むも、断られる。その腹いせに彼女を誘拐し、洞窟に閉じ込め乱暴する。アルヴィアーノは濡れ衣を着せられかけるが、それを切り抜け、意識不明のカルロッタを発見する。激情にかられたアルヴィアーノは誘拐犯を刺し殺し、カルロッタに駆け寄るが、彼女が死に際に呼んだのは、アルヴィアーノではなく誘拐犯の名前だった。錯乱したアルヴィアーノは、群衆の中へと走り去る。

〈前奏曲〉は単一楽章。寄せては返す波のような音楽を伴って、中低音の弦楽器が浮遊感のある、喜びとも悲しみともつかぬ旋律を弾く。そこに徐々に管楽器が合流し、大きな流れを形作る。行進曲風の部分に入ると雰囲気は祝祭的になる。賑々しさが静まると、バスクラリネットが音調に影をもたらす。しばらく享楽とその影とを同居させるように進み、やがてアレグロへ。安らぎを得たのち、改めて波が打ち寄せ、浮遊感のある楽想が戻る。しかし、最後にまたバスクラリネットが暗雲を予告して、曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1913年／初演：1914年2月8日、ウィーン／演奏時間：約22分
楽器編成／フルート3、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット4（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフォン、カスタネット、銅鑼、鐘）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦五部

メンデルスゾーン
ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

ドイツ初期ロマン派の作曲家フェリックス・メンデルスゾーン（1809〜47）が、短い生涯における円熟期に完成した代表作。ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーの諸作と並ぶ人気ヴァイオリン協奏曲である。

メンデルスゾーンは1838年、常任指揮者を務めるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターで友人のフェルディナント・ダーヴィトのために構想を開始した。しかし創作は難航し、ダーヴィトの助言を仰ぎながら、1844年にようやく完成。翌年3月、ダーヴィトの独奏、病気療養中の作曲者に代わるニルス・ゲーゼの指揮により初演された。

本作の主な特徴は、まずホ短調の調性（前記3人の曲はヴァイオリンがよく響くニ長調）、そして全楽章が切れ目なく演奏される点と、従来は第1楽章の最後に置かれ、内容も奏者任せだったカデンツァが、中間部に移された上、すべて楽譜に記された点にある。雰囲気の継続と一貫した曲調を企図したこれらの発想は、当時のヴァイオリン協奏曲としては革新的だった。

曲は、古典的な均整美と甘美なロマンティシズムが溶け合った名品。優美でありながらも憂いや力強さを併せ持ち、何より旋律の美しさは比類がない。また独奏はほとんど休みなく弾き続け、名人芸的な技巧を随所で披露する。

第1楽章　アレグロ・モルト・アパッシオナート　管弦楽による主題提示部がなく、独奏が2小節目から登場する点も斬新。そこで弾かれる有名な第1主題と、木管が出す穏やかな第2主題を中心に淀みなく展開され、ファゴットの持続音で次楽章へ移る。**第2楽章**　アンダンテ　叙情的な歌が流れゆくハ長調の緩徐（かんじょ）楽章。中間部は短調に変わり、荘重な趣が漂う。**第3楽章**　アレグレット・ノン・トロッポ〜アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ　短い経過部から2つの主題を軸にしたホ長調の主部へ移り、華やかな音楽がテンポよく繰り広げられる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1838〜44年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク
チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

チェコ国民楽派の大家アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）が残したチェロ協奏曲の最高峰。すでに国際的名声を得ていたドヴォルザークは、1892年9月、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバー女史の要請を受けて渡米し、同音楽院の院長に就任した。そして現地音楽の要素と故郷ボヘミアの民俗色を融合させた、交響曲〈新世界から〉等の傑作を生み出した。しかし望郷の念が募る彼は、1894年11月から95年2月にかけて、同郷のチェロ奏者ヴィーハンから望まれていたこの協奏曲を作曲し、4月に帰国してしまう。本作は手直しを経て1895年6月に完成。翌年ロンドンにて初演された。

曲は、哀愁に充ちた雄大かつ情熱的な音楽。大規模な構成の中に、高まる郷愁を反映したボヘミア的な情感が横溢（おういつ）している。特徴的なのが協奏曲には稀なほどシンフォニックな管弦楽。複数の主題をクラリネットが提示し、弦楽器の協奏曲での使用は稀なトロンボーンとチューバが重心の低い響きを作り出すなど、管楽器の活躍も目覚ましい。独奏は存分に技巧的ながら、明確なカデンツァはなく、管弦楽との一体感や音楽の流れが重視されている。

なお、第2楽章中間部の訴えるような主題は、初恋の女性ヨゼフィーナ（妻の姉）が好んだ歌曲〈ひとりにして〉に拠っており、1895年5月の彼女の死に際して、第3楽章終結部にも同旋律が加えられた。

第1楽章　アレグロ　共に哀切な冒頭の第1主題とホルンが出す第2主題を軸にした壮大な音楽。長大な管弦楽部分に続いて、朗々と歌い且（か）つ装飾的な独奏が縦横に展開される。

第2楽章　アダージョ・マ・ノン・トロッポ　ト長調の緩徐楽章。優しい主題が歌われる叙情的な主部に、激しさを湛（たた）えた中間部が挟まれる。

第3楽章　アレグロ・モデラート　民俗色が特に濃い終曲。力強い主要主題に二つの副主題が挟まれ、後半のしっとりした部分では第1、2楽章の主題も回想される。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1894〜95年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

チャイコフスキー
ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

ロシア最大の巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840〜93）が完成した最初の協奏曲。1874〜75年という比較的初期に書かれた作品ながら、彼の3曲のピアノ協奏曲はもとより、古今の協奏曲の中でも最上位の人気を得ている。

本作は以下の経緯でも知られている。チャイコフスキーが献呈を想定していた恩人で大ピアニストのニコライ・ルビンシテインに曲を聴かせたところ、「無価値で演奏不能」と酷評されてしまう。怒った彼は、問題点の指摘に対して、「一音たりとも変更するつもりはない！」と応酬し、ドイツの巨匠ハンス・フォン・ビューローに楽譜を送付。初演はビューローの演奏旅行先アメリカのボストンで行われ、献呈もビューローになされた。ただしルビンシテインもモスクワ初演を指揮し、後にはソロも演奏するなど曲の価値を認め、一方のチャイコフスキーも2度改訂を施している。

曲は、古典的な協奏曲形式の中に、民俗的色彩と哀愁や叙情性、そして豪壮な力感が盛り込まれたスケールの大きな音楽。ピアノも華麗で技巧的なソロを繰り広げる。

第1楽章　アレグロ・ノン・トロッポ・エ・モルト・マエストーソ〜アレグロ・コン・スピーリト　全曲の半分以上を占める壮大な楽章。変ニ長調の長い序奏部で開始。ホルンが出す主題は印象的だが、意外にも主部には全く登場しない。主部は、ウクライナ民謡に基づくリズミカルな第1主題と哀調を帯びた第2主題を中心に、多彩な展開を遂げる。数回に及ぶカデンツァも大きな聴きどころ。

第2楽章　アンダンティーノ・センプリーチェ　フルートが出す牧歌風の主題を軸にした緩やかな部分に、フランスの小唄を用いたスケルツォ風の急速部分が挟まれる。ここは全体が長調で推移する。

第3楽章　アレグロ・コン・フオーコ　エネルギッシュな終曲。ウクライナ民謡に基づく躍動的な第1主題と、流麗な第2主題が対比されながら烈（はげ）しく進む。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1874〜75年／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

シューベルト
交響曲 第7番 ロ短調 D759〈未完成〉

未完の作品でありながら、作曲者の代表作として人気を博している例はかなり珍しい。通常、交響曲は4つの楽章で構成される。しかし、フランツ・シューベルト（1797〜1828）はこの交響曲を第2楽章までしか完成させなかった。第3楽章の部分的なスケッチは残っているので、少なくとも当初は第4楽章まで書くつもりがあったにちがいない。ところが、なんらかの理由でこの曲は未完のまま放置されることになってしまった。第1楽章と第2楽章のみでおおむね25分ほどの演奏時間を要することを考えれば、それまでのシューベルトの交響曲と比べて、かなり長大な作品として構想されていたことになる。もし完成していたら、はたしてこれほどの人気作になっただろうかと、つい想像せずにはいられない。

もっとも、シューベルトが作品を未完のままにすることは決して珍しいことではない。番号こそついていないものの未完の交響曲はほかにも残されている。シューベルトの交響曲はそのいずれもが生前に公開演奏されていないことを考えると、むしろ演奏機会のあてもないまま交響曲のような大作を完成するほうが特別なことなのかもしれない。作曲は1822年。翌年、シューベルトはシュタイアーマルクの音楽協会の名誉会員に迎えられた返礼として、未完のままの楽譜を協会に送った。なぜ未完の曲を送ったのかは不明だ。作曲者の死後、1865年になって、ようやく初演が行われた。

第1楽章　アレグロ・モデラート　地の底からわき上がるような低弦の動機で開始され、オーボエとクラリネットがメランコリックな第1主題を奏でる。チェロによる第2主題はのびやか。鬱屈（うっくつ）した情熱をほとばしらせながら、大きなドラマを築く。

第2楽章　アンダンテ・コン・モート　管楽器の柔和な響きに導かれ、弦楽器が清らかな主題を奏でる。平安と苦悩を交替させながら、穏やかな終結部に向かう。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1822年／初演：1865年12月17日、ウィーン／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン
交響曲 第５番 ハ短調 作品67〈運命〉

なぜこの曲が「運命」と呼ばれるかといえば、冒頭の「ジャジャジャジャーン！」（運命の動機）について、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770〜1827）が「運命はこのように扉を叩く」と語ったから……と古くから言われてきたのだが、近年この逸話は人気がない。この証言を伝えた作曲者の秘書シンドラーはたびたびウソをついた信用できない人物であり、逸話の信憑性（しんぴょう）は低いとみなされているからだ。もちろん、ウソつきの言うことがすべてウソとは限らないので、本当に運命が扉を叩いている可能性も否定できないのだが。

実は「運命の動機」については別の証言もある。ベートーヴェンの弟子ツェルニー（ピアノ教本で有名だ）によれば、これはキアオジなる鳥の鳴き声に由来するというのだ。キアオジは日本ではなじみの薄い鳥だが、インターネットで動画検索すればすぐに鳴き声がわかる。「チチチチー」というよりは「チチチチチチ、ツィー」といった鳴き声だが、たしかに「運命の動機」によく似ている。野鳥図鑑によればキアオジは「ハンマーで叩くようなリズムで鳴く」。シンドラー説もツェルニー説も「なにかを叩いている」という点では意見が一致している。

第1楽章　アレグロ・コン・ブリオ　「運命の動機」で開始され、緊迫感あふれる楽想が展開される。「運命の動機」は全曲にわたり支配的な役割を果たす。

第2楽章　アンダンテ・コン・モート　通例ではゆっくりとした楽章が置かれる第2楽章だが、作曲者の指示は「コン・モート＝動きをつけて」。変奏曲形式。

第3楽章　アレグロ　スケルツォ楽章。うごくめくような低音に導かれて、ホルンが「運命の動機」に基づく主題を奏でる。切れ目なく第4楽章に続く。

第4楽章　アレグロ　勝利を思わせる主題が高らかに鳴り響き、高揚感をみなぎらせる。苦悩から勝利へと至る超克のドラマが完結する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1807〜08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク
交響曲 第９番 ホ短調 作品95〈新世界から〉

「新世界」とはアメリカのこと。チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）にとって、アメリカははるか彼方の異国である。ジェット機が飛び交う現代とは異なり、19世紀末にヨーロッパからアメリカに渡るためには船による長旅が必要だった。この曲は、はるばるたどり着いた新世界から故郷に向けた一種の音の便りとでも言えるだろう。

ドヴォルザークがアメリカに渡ったのは、ニューヨークに設立されたナショナル音楽院の院長に就任するためだった。1891年、裕福な実業家の夫を持つジャネット・サーバーは、本格的な音楽院をアメリカに設立すべく、すでに国際的な名声を築いていたドヴォルザークに院長への就任を依頼した。当初、ドヴォルザークはこのオファーを断っていたが、サーバー夫人からの粘り強い説得と桁外れの高額報酬に心を動かされ、渡米を受諾する。ドヴォルザークはアメリカの黒人霊歌や先住民の音楽から新たな刺激を受け、新世界で受けたインスピレーションと祖国への望郷の念を交響曲第９番〈新世界から〉へと結実させた。

第1楽章　アダージョ〜アレグロ・モルト　ゆったりとした序奏から、緊迫感みなぎる主部へと続く。勇ましく推進力あふれる楽想がくりひろげられる。

第2楽章　ラルゴ　イングリッシュ・ホルンによる郷愁を誘うメロディは「遠き山に日は落ちて」あるいは「家路」の題で広く親しまれている。

第3楽章　モルト・ヴィヴァーチェ　エネルギッシュな民俗舞曲風のスケルツォ。中間部はひなびた民謡風。

第4楽章　アレグロ・コン・フオーコ　あたかも機関車が徐々に速度をあげて爆走するかのような開始部は、大の鉄道ファンだった作曲者ならでは。壮大なクライマックスを築くが、消え入るような最後の一音が余韻を残す。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、弦五部

ブルックナー
交響曲 第８番 ハ短調 WAB108（ハース版）

ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンらウィーン古典派に始まるドイツ交響楽の、19世紀における終着点といえば？　アントン・ブルックナー（1824〜96）の交響曲、と答えたら、意外に思われるだろうか。

未完に終った最後の交響曲第９番まで、一貫して純粋器楽の４楽章制をとり、うちひとつの楽章は必ず３部構成の舞踊楽章（スケルツォ）である。また両端楽章は、原則としてソナタ形式に拠る。これだけみても、明らかに古典派路線ではないか。無の混沌から爆発へと至る曲の始め方、緩徐楽章の構成などには、古典派の臨界点ともいうべきベートーヴェンの交響曲第９番がこだましているだろう。

いっぽうで、半音階的書法、楽器法などには、たしかにブルックナーの崇拝したワーグナーからの影響が認められる。また、敬虔（けいけん）なキリスト者としての宗教的感情と、教会音楽（古い旋法など）への帰依も、はっきりとある。こうした諸特徴の混交が、ブルックナーの交響曲をユニークなものにしているのである。

そんな彼の交響曲のなかでも、第８番は独特だ。珍しくハープが用いられる点もそうだが、この曲においてのみ、第1楽章が弱音で終わるのだから。もっとも、当初は大音量の、ハ長調の総奏で終わるように書かれていたのだが……。そう、いかにもブルックナーらしく、この曲にも複数の「稿」が存在するのだ。

世間からなかなか理解が得られなかったブルックナーも、1884年、ライプツィヒにて、交響曲第７番の初演で大成功をみる。これに気をよくした60歳のブルックナーは、意気揚々と第８番を仕上げた。87年夏のことである。ところが、この「第1稿」が、頼みの指揮者、ヘルマン・レヴィから批判を受けてしまう。曰く、「美しいもの、均整のとれたもの、心地よい響きといったものに対する感覚が、鈍ってしまわれたのではないでしょうか。」

ブルックナーはショックを受けるが、やがて改訂に大奮闘する。そして90年、本日聴く「第２稿」を完成させたのだった。その過程で、弟子のヨーゼフ・シャルクらの意見も採り入れたようだ。そのうちの一つが、第1楽章はハ短調で静かに終わらせるべし、というものだった。ハ長調による大団円は全曲の最後に取っておく、という設計コンセプトである。

なお、本日は同じ第2稿でも、部分的に第1稿に近いロベルト・ハース校訂による版が用いられるが、このコンセプトは守られている。

第1楽章　冒頭の、低弦による呟(つぶや)くような主要主題は、リズムがベートーヴェンの交響曲第9番・第1楽章の第1主題そっくり。楽章最後（弱音終結部の手前）のクライマックスでは、ホルンとトランペット上に、このリズムだけが同音程でまっすぐに残る。ブルックナーはこれを「死の告知」と呼んだ。このリズムの最初、すなわち楽章冒頭の2音のリズム「タタン」を、以下、全4楽章を縫い合わす「原リズム」と呼ぼう。

第2楽章　舞踊系の音楽スケルツォ→おだやかな中間部（トリオ）→スケルツォの3部構成。楽章冒頭のホルン信号のリズムがスケルツォの運動を支える。これは第1楽章に由来する「原リズム」にほかならない。

第3楽章　長大で美しいアダージョ楽章。寄せては返す弦楽で始まるが、これもよく聴けば「原リズム」の反復だ。ワーグナーが愛用したテナー・テューバ（ワーグナー・テューバ）の響きが印象的。楽章なかほどでは、ワーグナーの〈ジークフリートの動機〉も。

第4楽章　冒頭の弦楽器は「原リズム」の繰り返し。行進曲など、世俗的な要素も多いフィナーレだが、「死の告知」もそこかしこに。終結部の最後では、全4楽章の主要主題が一斉にハ長調に変換され、それらが重なり大伽藍(だいがらん)を築く。本作を貫くのは、ベートーヴェンの交響曲第5番でおなじみの、ハ短調からハ長調へという「闇から光へ」のドラマトゥルギーである。1892年の初演は大成功だったという（ヨーゼフ・シャルク編の第2稿による）。

〈舩木篤也 音楽評論〉

作曲:1884～87年（第1稿）、1887～90年（第2稿）／初演:1892年12月18日、ウィーン／演奏時間:約80分
楽器編成／フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン8（ワーグナーチューバ持替4）、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、ハープ3、弦五部